



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第41号

## 演奏家の矜持を暗示した二人

モーツァルトへの手紙 (その17)

会員番号 K.618 加藤 明



### ◇我が掛け替えなきモーツァルトよ！

いまでも時々、あなたの創った音楽に触れて心底驚くことがあります。

日常、もう何十回、何百回と聴いてきているピアノ・ソナタやヴァイオリン・ソナタでもその生きている音色の豊かさに不意に囚われ、立ち止まる事は珍しくありません。それは、あなたがまるで「同時代人のように身近な存在として顕れてくる」からではないか？と勝手に思っています。そう、もうすぐ昇天して230年にもなろうというあなたなのに・・・。

このことは、単に「古くない」という表現では言い尽くせません。

こうした驚きは小生にとってあなたが「今と共に生きる」作曲家であり、この先も「共に生き続けるであろう」類を見ない芸術家であることの証だと思っています。

例えば、今年の四月に残念ながら天に召されたイエルク・デームス。

昨年の暮れに紀尾井ホールで開かれた「イエルク・デームス90歳寿記念コンサート」で視聴したあなたの【ロンドイ短調】の驚きの今日性を思い出します（恬淡な情景も相俟って身震いするほどの感動的なロンドでした！）。

もう一つ例えれば、アントン・ブルックナーとの対峙です。小生にとってはこの120年前にこの世を去ったばかりのシンフォニー作家のほ

うが、あなたより明らかに遠くに座しているのが分かります。何とかブルックナーのシンフォニー（特に晩年の作品）を聴いていると、昔の自分や懐かしいあの頃が自然に沸き上がり、結果己れに没入している自分に気づくことがよくあります。つまり、ブルックナーは小生にとって「過去を想起させる」作曲家として君臨しており、小生を内省的な世界に引きずり込み、身構えさせるという点で手ごわい芸術家なのです。

同じオーストリア生まれのお二人ですが、時代背景云々の違いは別にして、その織りなす響きの隔たりの巨きさを想わずにいられません（それを芸術家の個性と言ってしまえばそれまでですが・・・）。

あなたの音楽を聴き、その魅力の秘密を探ろうと意識的に歩み始めて30年ほど経過しました。改めてこの間に聴いたり、観たり、読んだりしたあなたに関するCD・DVD・出版物・記事や資料などの膨大な量を想うと、いかにあなたが小生の実人生に途轍もない影響をもたらせたか、が分かります。

そして、そんな小生のあなたへの向き合い方を決定的なものにしたのが、言うまでもなく1995年に一念発起で創設した《モーツァルト広場》でした。

ただただあなたをナマで聴きたいという野望がこしらえた奇妙な集団です。

ここでは予想もしないモーツァルトを愛する仲間たちや久元祐子女史をはじめ優れた演奏家とのエキサイティングな出会いがありました。正に、《広場》というネーミングに相応しくモーツァルトファン相互の交流を育ててきたものは老若男女を問わず熱心な会員のみなさんであり、そして他ならぬあなたに魅入られ、あなたを追い求め続ける多くの演奏家のみなさんでした。

今回は、そんな地元の演奏家の中から、それぞれ異なった活動をされているお二人とその活躍ぶりを直近の体験を通してご紹介したいと思います。



### ◎【ピアニスト佐藤滋さん】

昨年末のアニバーサリー・パーティー25th（例会）では、佐藤滋さん（通称「しげる先生」）による特筆すべき卓抜な「音楽授業」がありました。

《広場》会報の「酒とモツの日々」という名物コラムを執筆している幹事の一人ですが、

【モーツァルトの曲づくり】（テキスト付）をテーマに「ロンドニ長調K. 485」をお題にした興味津々大変分かり易い圧巻の30分授業でした（冒頭、かなりお酒がまわっていたようで、お節介な代表は少し心配しましたが・・・）。

実は今回、恒例の大谷祥子さんによる例会の基調演奏曲がこの「ロンドニ長調」でした。従って、「滋先生」にとっては解き明かす下地ができて講義しやすかった、とも言えるでしょう。ご自身もピアニストとして県内外で活動している「滋先生」ですが、今回の「ロンド」の授業の驚きと素晴らしさは一体どこからくるのでしょうか？

それは、「滋先生」のモーツァルトへの高邁な畏敬の念と、音楽芸術への謙虚な向き合い方、そして《モーツァルト広場》の会員に対する献身的とも言える一貫した共感の姿勢（愛情と言ってもいい）から発せられたものであり、その意味で、ほんとの知的な音楽授業だったよう

に思います。小生は、この曲へのモーツァルトの創意を尊重しながら、その構造・仕組みを素人にも分かり易く解き明かして、面白く知的探検の世界に招き入れるという離れ業の現場体験を忘れないでしょう。お酒が入った「音楽の先生」の世にも稀なモーツァルト講座の成功（！）、それは何よりも多くの「生徒たち」の傾聴する姿勢と愉しさに包まれた表情が雄弁に物語っていました。あれほど開放的で刷り込みの強い音楽授業は、ほとんどの「生徒たち」が初体験だったに違いありません。正に《モーツァルト広場》ならではの誇らしい「事件」と言えましょうか？

### ◎【ヴァイオリニスト駒込綾さん】

『いち、二、の三重奏』という名のクラシックユニットが山形市にあります。何やら愉し気なこの三重奏団のヴァイオリン奏者は《モーツァルト広場》サマーコンサートで最多の出演回数を誇る秋田市出身の駒込さん（通称「りょうちゃん」）です。この『いち、二、の三重奏』（ほかにヴィオラ村井薫さん、チェロ加藤皓平さんのユニット）が今年二月に尾花沢市でモーツァルトの「弦楽三重奏のためのディ



左からチェロの加藤さん、筆者、駒込さん、ヴィオラの村井さん

ヴェルティメント 変ホ長調K. 563」を演奏する機会があり、友人と二人で勇んで雪深い尾花沢に車を走らせました。

このモーツァルト畢生の傑作は数年前に《モーツァルト広場》でも演奏されてご存知の方も多いと思いますが、大変演奏者には負担の大きい曲としても知られている大作（6楽章編成で演奏時間は優に40分以上かかるのです）。

《広場》でのその時の演奏は、時間的な制約から中間の二楽章を割愛しての演奏となり、いささか物足りないままに曲を閉じたという経緯があります。

前回もヴァイオリンを弾いて下さった「綾ちゃん」からのご案内もあり、初めて全曲をナマで聴けるといふ、願ってもない機会だったわけです。

さてさて、そのディヴェルティメント拝聴後の感想は、この曲の特性をキッチリと押さえた演奏で、とても聴きごたえのある素敵なものでした。

ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロこの三つの楽器がある時は調和し、またある時は葛藤し、目まぐるしく旋律を交差させつつ響かせ合うという緊張感あふれるステージ。多くの視聴者が否応なしにこの特異な器楽組曲の世界に我を忘

れて聴き入っているように感じられました。最終楽章のアレグロ、ロンドにたどり着いた時の安堵感、モーツァルトのウィットが効いた優しさに包まれた至福感を何に例えたら好いでしょう！ 終演後、しばし沈黙を強いられた小生でしたが、会場の出口で晴々とした笑顔でお見送りの「綾ちゃん」、村井さん、加藤さんのマエストロに直面し、心からの感謝の気持ちを伝えることが出来て、とっても嬉しかった。

『いち、二、の三重奏』の凄さは三人とも心の底から音楽を愉しんでいる、というその音楽に対する隣とした態度・姿勢にあります。言い換えれば、孔子の《之を好む者は之を愉しむ者に如かず》を体現している姿勢（考え方）が感じられるのです。視聴者に決して、クラシック音楽特有の技巧にこだわった緊張感を感じさせず、しかも演奏する曲の本質を的確に捉える音楽への豊かな向き合い方、とも言えましょう（ほんと凄かったなあ！）。

今後、この『いち、二、の三重奏』という三人組のさらなる飛躍を祈り、さっきまでのステージの余韻を反芻しつつ、友人の運転で帰路に就いたのでした（無口な友が時折見せる、満足気のニンマリした横顔を見やりながら・・・）。

end

## 新文化施設の暗雲

会員番号 K.10 畠山久雄

秋田県と秋田市は秋田県民会館を解体し、跡地に新文化施設建設し令和3年度に完成させる予定で工事に着手しました。施設は約2,000席の大ホールと約800席の中ホールがメインであり、完成後には秋田市文化会館も廃止となります。つまり県民会館・ジョイナス、文化会館全てが廃止され、新文化施設に統合されます。

行政は併行して施設の運営管理計画（素案）を策定し、一般から意見を募集し、意見とその回答を県のホームページに公開しました。素案

には様々な意見が寄せられ、行政は丁寧に回答していますが、ホールの備品であるピアノに関して、私達が看過できないと思われる決定をしています。

以下、その看過ごせない内容と筆者の見解を記述し、各位のご賢察に浴したいと考えております。

☆

ホールの備品に関する行政の回答文は以下の通りです。（パブリックコメントNo.38）

新文化施設は、様々なジャンルで利用する多目的ホールであり、音楽ホールに特化したものではありません。備品計画は、今後、検討いたしますが、アトリオン音楽ホールとの棲み分けを図りながら、利用頻度が高いと思われるピアノを選定してまいります。(原文のまま)

回答文は、お役所特有の言い回しでメーカー名を避けていますが、私なりに読み解くと ①新文化施設のホールは多目的ホールであり、音楽ホールではない ②アトリオン音楽ホールとの棲み分けするので、備品はピアノだけとし、ヤマハを選定する予定 と読めます。

県民会館も市文化会館も利用頻度が高いピアノはヤマハですから、行政が選定するピアノはヤマハでしょう。使用頻度の低い外国産ピアノを選定することを不合理と考えるのは、行政マンとして当然でしょうが、舞台の常識からは外れています。

県民会館や市文化会館の備品で、ここぞという場面で使用されるピアノはスタインウェイ社製です。新文化施設の備品にスタインウェイ・ピアノがなければ、廃止の県民会館・文化会館の備品を下廻り、新文化施設を待ちわびている県民・市民を裏切ることになります。

行政は利用頻度をピアノ選定の判断材料にしていますが、専門家は利用頻度を判断材料にしません。

ご承知の通り、事務屋さんは短期間で人事異動し、どんな分野の事務も対応できるような能力を求められます。そのためか、文化施設関連の事務方で専門的知識を有している人は皆無のようです。

行政の主張を私なりに言い替えると「利用頻度が高い普段着」だけ用意して、「利用頻度の低い外出着」は用意しないということになります。いわゆる外出着を持ち合わせていないことは、一般にはあり得ないことです。外出着たる

それなりのピアノが用意できなければ、一流の演奏家も新文化施設は避けるので、地域文化にとって大なる損失となります。なお、最近はずいぶん着たるヤマハピアノも日本の優秀な技術が結集され、外出着と比べて見劣りしないとの意見もあります。

『聴きたい人はアトリオン音楽ホールで聴けば良いではありませんか』という論もありますが、700席しかないホールでは演奏家のモチベーション、チケット単価に及ぼす悪影響は避けられません。アトリオン音楽ホールでは大編成オーケストラは不可能であり、上演できないプログラムがあることも知られています。

☆

さて、文化施設の備品に関する私の意見（パブリックコメント）は次の通りです。

運営管理計画に備品（ピアノ、ハープシコード、ポジティブオルガン等）について記載されていないが、躯体完成時には搬入しなければならないものです。専門性が高いので、備品選考体制を含め計画に組み入れはどのようにでしょうか。

特に、スタインウェイ、ベーゼンドルファー、ファツィオリ、ベヒシュタインの4大ピアノは数年前からの手配が必要であり、容易に入手できるものではありません。(原文のまま)

意見は「備品選考体制を運営管理計画に組み入れるべき」という主旨です。

行政は選考体制について「今後、検討いたしますが」と前置きする一方、続く文章でピアノ選定に関し自ら結論を下しております。これには立場をわきまぬ傲慢さが感じられます。なお、「今後、検討いたしますが」は、お役人用語で「何もしない」を意味すると聞いています。

さらに、備品はピアノだけでない意見しても、回答では全く触れていないことも不可解です。

失礼ながら、事務方の皆さんは自分の知らな

い楽器について、学ぶことすら避けたものと推察します。

繰り返しになりますが、有識者以外が備品選考をすることに問題があるように思われますし、多目的ホールだから音楽的な事はあまり考慮しなくて良いという見解も事務方の思い込みと受けとめられ兼ねません。そしてその結果、県

民・市民をないがしろにしているように感じられてしまうのです。

さて、秋田県最高の文化施設に相応しい楽器を選定すべく、有識者による備品選考体制が構築できるか否か、未来の秋田の音楽文化にいま重い暗雲が垂れ込めているように思われますが・・・。



解体された秋田県民会館 2017.6.13. 筆者撮影

## 酒とモツの日々 (41)

会員番号 K.488 佐藤 滋

モーツァルト広場が「生」の演奏にこだわるのは、音楽は同じ屋根の下、同じ空気の中から産みだされることに、かけがえのない臨場感、同時性が得られるからに他ありません。偉大な音楽ほど、実音として再生される場に立ちあうことは人生の喜び、楽しみにつながります。それは人物との出会いにもあると思います。

平成の終わりに、よく天皇陛下がTVに映っていましたが、4Kだろうが8KだろうがTVで見る限りでは、お年を取られたな、仲睦まじ

くて良いな・・・と思う程度ですが、もし陛下が目の前に現れたら私は失神してしまうでしょう。それだけ「凄い」人物を肌と空気で感じることは別次元の体験なのです。

歴史上の人物はどうなるのか。近年、田中角栄の再評価が進んでいます。ロッキード事件の時は、マスコミ、庶民一緒になってあれほど批判したのに、地域格差、中国との関係が大きな課題となる昨今、彼の功績によりやく目が向けられてきたのでしょうか。存在が大きすぎた

めに、器の小さい私たちは、一部を見て全体を決めていたのかもしれませんが。歴史的評価はもっと先のことになるでしょう。

250年前のモーツァルトについては、とにかく沢山言われ、書かれてきたので辟易している方もおられるでしょう。批評家、研究者に振り回されず、自分の素直な思いで楽しみたい、と思うこのごろ、「モーツァルトのムクドリ」という本を読みました。(土崎図書館で借りられます)音楽好きな鳥類学者が、ふとしたことでモーツァルトはムクドリを飼っていた、ということを知り、自分もムクドリを飼いながら執筆したエッセイです。その中で、ムクドリ(モーツァルトの愛鳥の名前はシュタール。3年間一緒に暮らし、父レオポルドの死の二ヶ月後に死ぬ)の囀りがピアノ協奏曲第17番に生かされているというのです。さっそくCDを聴いてみました。

～シュタールと暮らした三年間に、モーツァルトは仕事で認められようと奮闘し、金銭的な苦境に陥り、幼い頃から仲良しだった姉のナンネルと疎遠になり、愛するわが子ふたりに加え

て父親も喪った。こうした経験のあいだずっと、ムクドリはいつもほがらかでお茶目な相棒としてそばにいた～

(ライアンダ・リン・ハウプト著)

どこがムクドリの囀りなのか良くわかりません。でも、もう解釈とか演奏家とか録音とかはどうでも良く、モーツァルトがシュタールを肩に乗せて作曲している姿が目には浮かんできます。薄幸な作曲家と、はかない命の小鳥が共鳴している。「いっぱい泣いたけど、もう変わることを恐れてはいけないよ。変わってしまったことを嘆いてもいけないよ。さあ、前を向いて生きていかなきゃ！」

なんて哀しくて温かい二重唱だろう。ああ、こんな聴き方も良いな……。250年の時の流れが、難しい理論をみんな流し去って、今とつながっている自然(鳥、花、風、月……等)を介して、その時の作者の魂に近づいてゆく。

またモーツァルトが身近になったような気がします。でも、目の前に彼が現れたら……。私は失神するでしょう。

## 事務局より

梅雨入りはしたものの雨に恵まれない?天候が続いています。予報では梅雨明けが遅くなり8月ころになるとか。あるニュースでは2100年の秋田市の夏の最高気温は40度を超えるという予測も。一方老後2000万円が……という話題もあります。これからの時代は本当に先がわかりません。過去のデータや経験

が通用しない時代になるのでしょうか。AIや自動操縦ロボットが日常の風景になるのかも。こんな時代がやってくるとモーツァルトら偉人たちは想像できていたのでしょうかね。過去と未来をよく考えながら毎日を過ごしていきたいと改めて思う今日この頃でした。(K.575)

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております(R元年7月現在90名) [モーツァルト広場](#)

入会金: ¥2,000 年会費: ¥3,000 (諸会費、別途) ご紹介下されば幸いです。

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田 (事務局) 080(1673)8322